

2020年6月4日

2019年度 ALL DOSHISHA 共修プログラム
実施プロジェクト成果報告書

プロジェクトタイトル
身近にあるネジを知り人に伝えたいような体験をする

プロジェクトメンバー			
役職	氏名	学科専攻	学年
リーダー	宮崎拓巳	化学システム創成工学科	大学1回生
サブリーダー	藤原ゆみ	化学システム創成工学科	大学1回生
	Nyambu Nathaniel Mupe	機械工学専攻	大学院2回生
	Adi Patria	数理環境科学専攻	大学院1回生

支出経費			
支出項目	単価 (円)	数量	小計 (円)
交通費			
(株)丸エム製作所 事前打ち合わせ (大東市)	840	1	840
周知用ポスター印刷代			
A0 サイズ	500	1	500
A1 サイズ	250	11	2,750
謝礼			
(株)丸エム製作所 講師謝礼	10,000	2	20,000
(株)丸エム製作所 施設見学謝礼	2,180	1	2,180
		合計	26,270

プロジェクトの目的と狙い
<p>近年ねじは宇宙開発や自動車などと最先端を進んでいる中で、私たちはねじが身近な生活に沢山あるにもかかわらずあまり理解されていないという点に着目しました。また、日本の中小企業を訪問し、ねじの精度の高さや現状を伝え、身近にあるねじを見たり触ることで留学生に興味を持ってもらうという目的がありました。そしてねじをより知ること同志社大学（特に機械工学科）へ留学生を増やすこともできると考えました。</p>

プロジェクトの実施内容（1 ページ以上）

- 取り組んだ実施内容を時系列にかつ具体的に記入してください。
- 誰がどのような役割で何をしたかも分かるように記入してください。
- 適宜、取組状況の画像データを貼付いただいても結構です（様式の半分以内の分量とします）。

6月宮崎と藤原と MUPE の 3 人で留学生を呼び込む ALL DOSHISHA 共修プログラムが始まりました。その中で高い日本の技術を持つ中小企業の魅力を伝えたいと考え、生活の基盤を支えるねじにしました。留学生を呼びこむために私たちはねじの優れた技術をもつ企業を何社かをインターネットで選定しました。その中ホームページが英語で翻訳がされていて、企業の紹介映像がねじの製造過程など丁寧に紹介するものであり、最新の医学への技術開発も行っているという点から留学生に興味を持ってもらえるもので自分たちの目的に沿った内容だと判断したため株式会社丸エム製作所にしました。企業へこのプログラムの企画内容を伝えるためメールでアポイントを取った後に、プロジェクト全体の行いたい内容や人数や費用を企業とメールでやりとりをしながら決定し、企画書を作成しました。内容は企業が同志社大学を訪問し、参加者へねじの基礎に関するレクチャーと参加者が企業を訪問し工場内を案内してもらう工場見学の 2 つに分けました。このプロジェクトの参加者の中には、専門的な知識を持っていない人も集まると考えたため基礎的な技術や歴史の内容にしました。また、工場見学の 1 週間前にレクチャーをすることでより実際の工場見学で事前に学んだ知識を活かせる狙いがありました。

8月7日宮崎が株式会社丸エム製作所を訪問し、事前に作成していた企画書を用いて今回行われたプロジェクトの内容を確認し、具体的に実施する日程を取り決め、実際に当日見学する予定の工場内を案内してもらいました。

10月10日理工学部事務室の呼びかけのおかげで ADI がプロジェクトメンバーに参加し、留学生は 2 人になりより心強くなりました。

10月11日には藤原と改めて電車を用いて企業を訪問し、事前に作成を依頼していたレクチャーで話される PowerPoint の内容を確認しました。また、レクチャー当日については、藤原が司会を進行し、企業の方が英語でねじに関する歴史的な話と技術に関する話の二部構成にさせていただく、ということを決めました。確定した企画内容を踏まえて、参加者募集のための広報用のポスターの作成を英語で行い、よりたくさんの方がすぐに見たときにねじに関するイベントだとわかるように大きな写真を貼り、QR コードを掲載することで誰でも簡単に応募出来るようにし、学内に許可を得て掲示しました。ポスター作成は MUPE が主に担当しました。また他にはメールで本学の留学生へのお知らせを送信し、レクチャーと工場見学の 2 つのセクションに分けて宮崎に参加を申し込めるようにしました。

11月12日に具体的に集まった人数を企業へ報告し、実際に行われたレクチャーでは 12 人、工場見学では 11 人が参加しました。

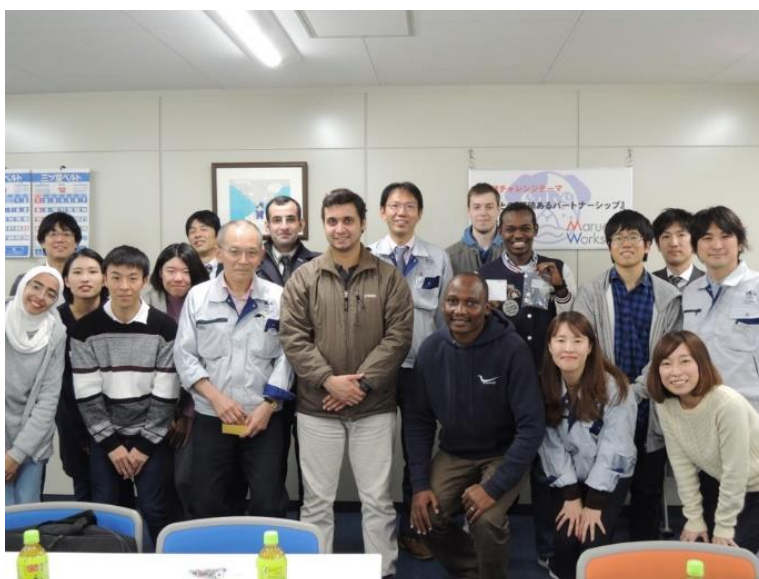
11月15日のレクチャーでは同志社大学京田辺校地の理化学館 2 階のラウンジで行われ、スクリーンを用いて英語でねじの歴史や用途について初心者にもわかりやすく説明していただきました。ここでは藤原が司会進行を担当しました。終了後アンケートを紙で配り、感想を書いてもらいました。内容としてはレクチャーを受ける前と比べてどれほどねじに対して関心や知識に変化があったかを尋ねるものであり、このアンケートを通じ

て、今回のレクチャーがどれだけ意味があったのかを具現化する目的がありました。



レクチャーでの集合写真

11月22日の工場見学は株式会社丸エム製作所に同志社大学に集合した後、電車を用いて向かいました。日本人と留学生の2班に分かれて日本語と英語を企業の方に話していただきました。内容は主にレクチャーで学んだねじの製造過程を実際に見ること、ねじの強度を測定する精密機器を見ることでした。見学中留学生は担当の方にたくさんの質問をし、知識を深めていきました。最後に質疑応答の時間を30分ほど設けました。またねじを参加者全員に渡すことで終わった後も忘れないよう心がけました。後日参加者にはネットを通じてアンケートに答えていただき、ねじに対してのイメージの変化や環境問題について中小企業のイメージ変化などを問うことでどれだけ成果があったのかを知ることが出来ました。3月には活動報告書作成のために企業に今回のプロジェクト内容を同志社大学のホームページに掲載しても良いかを確認し、許可を得ました。



工場見学での集合写真

プロジェクトの成果（1 ページ以上）

- 当初計画していた達成目標と比較して成果を記入してください。
- プロジェクト開始時からどのような能力が向上したかを記入してください。
 - ・グローバルマインドの3要素（①グローバルな視野、②多様性の尊重、③異文化理解）
 - ・社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素 ①前に踏み出す力（主体性／働きかけ力／実行力）②考え抜く力（課題発見力／計画力／創造力）
 - ③チームで働く力（発信力／傾聴力／柔軟性／状況把握力／規律性／ストレスコントロール力）
- 当初計画していた目標に至らなかった場合は、①何が実施・実現できなかったのか。②その要因は何か。③考える解決策 を具体的に記入してください。

私たちのグループは、今回のプロジェクトを通して、ねじについて留学生に興味を持ってもらい同志社大学に留学してもらおうという目標を掲げていました。

まず留学生にねじに興味を持ってもらおうという狙いはアンケートによると8割以上の方がレクチャーや見学を終えてよりねじに興味を持つようになったと答えていることやレクチャーや工場見学での留学生からたくさんの質問も考慮すると十分に達成できたと考えています。アンケートには「工場見学での技術者による案内が親切でわかりやすかったです。」「ねじはシンプルだけどとても興味が沸きました。」「工場で見た機械は全てかっこよかったです。来年もする価値があります。」などの回答がありました。留学生の中にはインターンシップを希望する方もいました。特に事前に学んだことを実際に目の前で製造されるねじを見ることがより効果的だったと思います。

次に留学生を海外から同志社大学に来てもらおうという目標については留学生が実際に見学を行う中でねじを聞いて見て触ることでよりねじの製造過程や経済や日本の持つ技術の高さに興味を持ってもらい、友人や家族に伝え、より留学生が増えると考えました。そのために形として残るねじを配ることで留学を終えて、帰った後も忘れることのないようにしました。また、同志社大学のホームページに活動内容を記載することで海外の方が見たときに興味を持ち、来てもらおうという工夫もしました。

自己の成長としてははじめにプロジェクトを通して業務連絡を行うことで社会の基本的な連絡方法を学びました。署名のやり方や業務的な定型文など初めての連続でした。一から考えて作っていくというのはとても創造的で何が出来るかわからない楽しみがあり、自分の中で刺激的な活動で主体性や共感性が向上したと思います。

グループ全体としては留学生との共同作業は新鮮でしたが初めは価値観の違いを大きく感じていました。しかし、一緒に時間を共有することで少しずつ共有し理解していくことで上手くコミュニケーションをとることが出来、まとまりが出来ていくのを感じました。お互いの価値観を教え合い、認め合うことが大切だと強く感じました。特に自分たちで考えたレクチャーがうまく留学生の興味を引き、うまく進行できたときは大きな一体感が出来ていました。個人としてではなくチームで英語力を補ったり、心が折れそうときは支えていくことが出来ました。

しかし、チーム間での情報管理や状況把握はあまり上手くいかなかったように思います。企業や同志社大学からの連絡をチームに伝えることなく自己の判断だけで決めてしまうことがあり、混乱することがありました。解決としては送られてきたものを転送し、共有するシステムを作ることだと考えています。

今後期待できる成果の波及効果（1 ページ以内）

- 今後、成果物を大学がどのように活用することが望ましいかを記載してください。
- 成果物をさらに波及するための考える取り組みを記載してください。

活動内容を他の中小企業に報告することで、繋がりをより強くし、海外にアピールすることです。繋がりを強くすることでこれからの共修プログラムでより優位に働きかけることが出来、活動が活発になると考えられます。そうして海外にアピールすることで同志社大学が他の大学とは異なる興味深い大学と認識してもらうことで海外での認知度が高まり、より多くの人を呼び込むことが期待できます。これからの取り組みとしては学内の生徒に活動の興味を持ってもらうためにメールなどで活動報告を伝えることです。今回の活動においてもメールでの告知で参加した人は少なくないため英語と日本語の両方を用いて今回の活動内容を簡潔にまとめた読みやすい文章を作成することが有効だと考えられます。

2020年5月8日

2019年度 ALL DOSHISHA 共修プログラム
実施プロジェクト成果報告書

プロジェクトタイトル
理工学の視点から多角的に日本の最先端技術を探る

プロジェクトメンバー			
役職	氏名	学科専攻	学年
リーダー	藤森 達也	電気工学科	B1
	森 美聖	化学システム創成工学科	B1
	嘉村 美鳥	数理システム学科	B1
	Alansari Shouq	機械工学専攻	M1

支出経費			
項目	単価 (円)	数量	小計 (円)
交通費			
JR 西日本 事前打ち合わせ (大阪市)	1,360	3	4,080
謝礼			
JR 西日本 施設見学謝礼	2,268	1	2,268
		合計	6,348

プロジェクトの目的と狙い
<p>日本の列車は安全かつ時間に正確であることで有名である。</p> <p>まずはレクチャーによりその最先端の運行技術がどのように体现されているかを日本人学生、留学生に知ってもらい、興味をもってもらい、その後、実際に列車の運行技術に関する施設にて説明を聞き、考え、体験する。最先端の運行技術を目の当たりにすることで、日本人学生、留学生が勉学を行う上での大きな刺激にする。</p> <p>さらに大学ホームページ上でプロジェクト成果を公表することで、日本の運行技術の高さを発信すると同時に、同志社大学でのプロジェクト活動を海外の学生にアピールし、同志社大学に関心を持ってもらい、より多くの留学生が同志社大学に来てもらえるようにする。</p>

プロジェクトの実施内容

- 取り組んだ実施内容を時系列にかつ具体的に記入してください。
- 誰がどのような役割で何をしたかも分かるように記入してください。
- 適宜、取組状況の画像データを貼付いただいても結構です（様式の半分以内の分量とします）。

プロジェクトを行うにあたり、日本の最先端の技術を誇る新幹線事業を行っており、留学生からの知名度が高く、地理的条件も良好な西日本旅客鉄道株式会社（JR 西日本）に協力を仰いだ。9月下旬に始めてメールをし、10月上旬に共修プログラムの主旨と電車グループの企画内容をお伝えするため本社へ事前訪問に伺った。その結果、JR 西日本に協力していただけることになった。事前訪問は計3回行った。2回目は具体的な当日の内容を話し合うとともに、プロジェクトの日付(2月18日)を確定させた。3回目の訪問では、留学生と日本人学生の双方に有意義な内容にするため、当日提示するパワーポイントの資料内容の議論や、当日へ向けた最終調整をした。

参加者の募集は理工学部の留学に興味を持つ学生と理工学部の留学生を対象にし、Google Formを用いて行った。プロジェクト概要と当日のタイムスケジュールを周知メール内の添付ファイル内にて示した。

当日はJR 西日本社員研修センターに訪問させていただき運転設備と列車ダイヤの関係性についてレクチャーと施設見学を行った。先に行ったレクチャーでは、運輸部の方に実際のダイヤを作る際、定時運転を実現するために考慮が必要な運転設備による運転上の制約条件とその基本的な考え方について学び、運転設備を基準としたダイヤの作成方法を理解した。例えばパワーポイントや実際にダイヤを作る際に用いるランカーブを見せて説明していただいた。学んだ知識をアウトプットする形で、ダイヤが成立するために必要な運転設備を付け足すというクイズも行った。難解な内容も含まれたが、一方的な形式のレクチャーではなく、クイズを用い参加型とした。それ故参加者が主体的に議論に参加でき、理解がより深まったと思われる。

レクチャーの後の施設訪問では、レクチャーで学んだ運転設備である分岐器や信号機が実際にはどのように制御されているか確認した。また、新幹線の運転シミュレータを体験することで、運転士の方は実際どのように列車ダイヤを用いて運転されているのかを体感した。具体的には±5秒以内の到着時刻、様々な運転設備による制約から起因する制限速度など運転士の方が電車の運転をする際に考慮する条件の多さとその難易度に驚嘆した。新幹線の運転は特に最先端の技術と人が融合していると感じた。



参加者からは、「とても興味深い内容であり、講義も施設見学も楽しめた」という声があり、とても有意義な体験となったと思われる。

プロジェクトを通して、藤森は主に JR 西日本との連絡、各種資料の作成、施設訪問の際の通訳をした。森は、主に各種資料の英訳を行った。また、嘉村は本番での司会やポスターの案作り、Alansari Shouq は主にポスター作成・デザインを行った。



プロジェクトの成果

- 当初計画していた達成目標と比較して成果を記入してください。
- プロジェクト開始時からどのような能力が向上したかを記入してください。
 - ・グローバルマインドの3要素 (①グローバルな視野、②多様性の尊重、③異文化理解)
 - ・社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素 ①前に踏み出す力 (主体性/働きかけ力/実行力) ②考え抜く力 (課題発見力/計画力/創造力)
 - ③チームで働く力 (発信力/傾聴力/柔軟性/状況把握力/規律性/ストレスコントロール力)
- 当初計画していた目標に至らなかった場合は、①何が実施・実現できなかったのか。②その要因は何か。③考える解決策 を具体的に記入してください。

まず、達成目標と比較した成果について述べる。

当初はプロジェクトを二日に分け、初日にダイヤ作成についてのレクチャーを行い、後日企業訪問で新幹線・在来線の司令室を見学させていただく計画であったことを企画申請書に記載していたが、司令室はセキュリティ上の問題で許可が得られなかった。そのため、担当者の方とプロジェクトメンバーで話し合いをした結果、JR 西日本の社員研修センターにて同日開催で運転設備やダイヤ作成に関するレクチャー・施設訪問をさせていただくことになった。内容に変更はあったが、日本の鉄道の最先端技術を留学生と共に体験することができたため、目標は概ね達成できた。

反省点としては、レクチャーや施設訪問で鉄道の用語が多く出てきたため留学生が内容を少し理解しにくかったと思われる点である。運転設備や運行技術に関する用語をあらかじめリストアップし、簡単に英語での説明をした資料を作り配布しておけばより理解が容易になったと考える。また、このプロジェクトの成果を広めるための工夫が足りていないと考えるので具体的な周知方法を考える必要があるだろう。また、このプロジェクトの内容を知ってもらい、来年度以降の共修プログラムに興味を持つ人を増やすことも外国人留学生を増やすということにつながっていくと感じる。今後も共修プログラムに興味を持ってもらうためにする活動は継続していく。

このプロジェクトを通して向上した事について述べる。

当初電車グループの中心メンバーは日本人学生の3人であった。日本人学生のみではどのように留学生と日本人学生両方に支持してもらえるプロジェクトになるのか思考する

のが難しかった。しかし、プロジェクト中盤で Alansari さんが加わったことにより、留学生としての視点を聞きながらプロジェクト内容を検討することが可能となった。その話を聞き電車になじみのない参加者も多数いると思われたので、レクチャーの冒頭は基本的な内容を説明することにして、参加者全員が学ぶ機会を得られるような内容になるようにした。そのため、留学生・日本人学生両方の視野で異文化・様々な価値観を理解しようと努める事ができたと考える。

また、プロジェクトを事務の方に支えられながらではあるがやりきれたことで、社会人基礎力として特に主体性・実行力が向上したと感じる。新しいプロジェクトを考え、それを様々な価値観を持った留学生に説明し理解してもらい実現させることは大変ではあったが、それに付随して書類作成や企業の方へメールを送る際の作法など、貴重な経験ができた。課題解決能力に関しても、司令室訪問が不可能となったが担当者の方とメンバーで他にできることを模索しレクチャーでは運転設備に関する内容を行い、結果的に当日は有意義な体験となったため、向上したといえる。

一方、チームで働く力については課題が残った。メンバーそれぞれが忙しく全員で集まる時間を十分に確保できず、2人、3人で話し合うことが多かった点である。原因としては、プロジェクトが少し時間に切迫されていたことである。定期的集まる日程を決めておく、時間にゆとりを持って活動するなどしていればさらに活発な議論ができ、さらに良いプロジェクトができたと感じる。

最後に、プロジェクト当日、レクチャーでのダイヤに関するクイズを行っている時や新幹線運転シミュレータを体験する際多くの留学生・日本人学生が興味を持ち質問や活発な議論を行っていたのが印象的で、感懐を覚えた。改めてご協力いただいた JR 西日本と担当者の方に感謝を申し上げたい。

今後期待できる成果の波及効果

- 今後、成果物を大学がどのように活用することが望ましいかを記載してください。
- 成果物をさらに波及するための考える取り組みを記載してください。

成果物については同志社大学への留学生を増やす事につながるように、来期以降のプロジェクトの募集・活動の段階で参考資料として公開する。また、大学ホームページ上に公開し、引き続き常時閲覧可能にすることが望ましい。成果物をさらに波及させるために、ホームページ上で共修プログラムを目立つように工夫する必要があると考える。より多くの方に成果を見てもらい、共修プログラムに興味を持つ学生が増えることを期待する。

2020年5月25日

2019年度 ALL DOSHISHA 共修プログラム
実施プロジェクト成果報告書

プロジェクトタイトル
理工学の視点から多角的に日本の最先端技術を探る (NTT グループ)

プロジェクトメンバー			
役職	氏名	学科専攻	学年
班長	森原涼翔	インテリジェント情報工学科	B1
班員	赤壁真実	環境システム学科	B1
班員	木村啓韻	電気工学科	B1
班員	Fernandez Don Martin Pante	電気電子工学専攻	M2
班員	Mohammed Awad Hajjaj	情報工学専攻	D2

支出経費			
支出項目	単価	数量	金額
謝礼			
NTT 西日本 施設見学謝礼	2,160	1	2,160
合計			2,160

プロジェクトの目的と狙い
留学生の興味を引く日本の最先端技術として、第5世代移動通信システム(5G)への関心が高まりつつある今日に、通信技術が人々の生活の一部となっていることに着目しました。現在のような高度に情報化した社会で重要な役割を持っている情報通信技術や、それを可能にしている環境がどのようになっているのかを学ぶことができると考えたからです。そして日本でも有数の規模の設備を有しているNTT西日本に見学を申し込むことにしました。以上のような目的を持って、プロジェクトを進めました。

プロジェクトの実施内容（1 ページ以上）

- 取り組んだ実施内容を時系列にかつ具体的に記入してください。
- 誰がどのような役割で何をしたかも分かるように記入してください。
- 適宜、取組状況の画像データを貼付いただいても結構です（様式の半分以上の分量とします）。

プロジェクトの実施に際して、まずお盆明け頃に加藤先生に NTT 西日本の方へコンタクトをとっていただいた後、8 月 23 日に見学の際の要望を NTT 西日本の方へ伝えていただきました。

その後、10 月 29 日の午後 5 時、担当の方に実際に同志社大学に来ていただいて、森原・赤壁・木村・加藤先生を加えた五人で打ち合わせを行い、次の三つのことを決めました。

一つは日本語が分からない留学生がいるが、見学の付添をして下さる方の中に英語での通訳が出来る方がいないため、その場で通訳できるよう事前に出てくると思われる語句を調べておくこと。これについては、見学する場所ごとに森原・木村の二人で通訳の担当を変えて、一人あたりの負担を減らすようにしました。

二つ目は、見学する場所が西日本の通信の重要な拠点であり、テロの対象になりうる場所なので、参加者以外には場所を知らせないよう注意すること、万が一のために、事前に参加者の名簿を提出することです。名簿に関しては、Google フォームで参加者を募集した後、確定した参加者の情報を森原・赤壁・木村の三人で集め、一つにまとめて提出しました。

もう一つが、見学に参加する留学生を募集するために、ポスターを作成することです。ポスター制作については、Fernandez に基本のデザインとレイアウトを考えてもらい、それを班員全員で発展させるという形で行いました。加えて、ポスターは張り出しではなく、メーリングリストを用いて情報を拡散する形で募集をかけました。このときのメールの文面は森原・赤壁・木村の三人で分担して作成しました。

そして 11 月 26 日の昼頃、森原・木村・Fernandez の三人に参加希望者と先生方を加えた数名で、NTT 西日本の施設見学に向かいました。見学中は、上記で述べたように日本語が分からない留学生の横で森原・木村の二人で分担しながら通訳をしました。

見学内容は大きく分けて四つに分かれていて、まずは IP 設備を見学しました。IP 設備とは、データをパケット交換（データを短時間蓄積してから一定の単位に分割して送ること）という方式でやりとりする機械類のことで、この方式は Web ページの閲覧時などに用いられています。

次に見学したのが、伝送設備という、各拠点から別の拠点へデータを送るときに伝送路上にデータを流し込む機械設備で、この伝送技術に関しては、如何に高品質な通信環境をうみだせるかが重要になってくるので、研究が盛んに行われています。

そして、この後とう道（ケーブルが市内だけで約 100km 伸びている地下のトンネル）を見学しました。ここは特に警備が厳重で、社員の方でもよっぽどのことがないと入れないようになっているそうです。

最後に電力設備を見学しました。電力は上で出てきたような設備を動かすのに不可欠なものであり、災害時など電線からの電力が途切れてしまうようなときにも稼働している必要があるため、そのような場合でも対応できるよう何重にもバックアップの設備が

用意されていました。

以上の見学を終えたあと、より深い理解を得るため、NTT 西日本の方から提案のあった同志社大学内のサーバールーム見学を実施しました。

まず森原が情報企画課へ学内のサーバールームの見学依頼をしました。その後、森原・赤壁・木村と情報企画課の方と 12 月 4 日、12 月 11 日の昼休みに打ち合わせをし、以下のことを決めました。

まず一つは、参加者に配る資料の作成です。今回の見学では、事前に詳しい資料をいただけたので、見学前に森原が英訳した資料を作成しました。

もう一つは参加者の募集です。これは、前回と同様に三人で作成したメールをメーリングリストを用いて配信し参加者を募りました。

以上の準備を経て、見学を実施しました。見学の内容としては、まずサーバールーム内の設備を実際に見ながら説明を受け、その後別の建物の設備を見学するというものでした。当初、企画課の方は英語での講義は難しいと仰っていたので、その場で通訳しながら進めようかと思っていましたが、専門用語が英語をそのままカタカナにしたものが多かったり、留学生の方が元々詳しいというのもあって、事前に用意した資料を使いながらスムーズに進めることが出来ました。

プロジェクト企画終了後は、活動報告書を作成しました。そして大学のホームページへ掲載するにあたり、NTT 西日本の方へ内容に不備や非公開情報がないかの確認をしていただきながら報告書を仕上げました。

プロジェクトの成果（1ページ以上）

- 当初計画していた達成目標と比較して成果を記入してください。
- プロジェクト開始時からどのような能力が向上したかを記入してください。
 - ・グローバルマインドの3要素（①グローバルな視野、②多様性の尊重、③異文化理解）
 - ・社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素 ①前に踏み出す力（主体性／働きかけ力／実行力）②考え抜く力（課題発見力／計画力／創造力）
 - ③チームで働く力（発信力／傾聴力／柔軟性／状況把握力／規律性／ストレスコントロール力）
- 当初計画していた目標に至らなかった場合は、①何が実施・実現できなかったのか。②その要因は何か。③考えうる解決策 を具体的に記入してください。

私たちのグループは、今回のプロジェクトを通じて、①実際に設備を見学し、②NTTの基盤である情報工学や通信技術などの工業分野に関するレクチャーを受け③現代人の多くが親しんでいるであろうスマホという媒体の通信を司る部分に使われている多くの工学技術についての理解を深める、という達成目標を掲げていました。

はじめに、プロジェクトの成果について書きます。一つ目は①実際に設備を見学することについてです。この点に関しては、社員の方でもなかなか入ることの出来ない場所を見学させていただいたり、特にこの設備について詳しく知りたいなどの要望に応じていただけたりというふうに、内容の充実した見学を実施することが出来ました。

二つ目は②ICTに関するレクチャーを受けるのですが、実際に設備を見ながら講義を受けられたので、机で受ける授業よりもわかりやすく、より深い理解が得られました。

以上のように、当初計画していた目標のうち、①と②は達成出来ていますが、③については達成出来なかった点があります。

それは、NTT西日本の施設見学の際の通訳が満足に出来ず、留学生の理解度が不十分になってしまったことです。原因としては、単語の下調べとその意味の理解が不十分であったことが挙げられます。この経験から、学内の見学の際は、事前にいただいた資料の英訳に加えてそれぞれの単語の意味も併せて載せるようにしました。この結果、前の見学に加えてより深い通信技術についての理解を得られたと感じました。

次は、プロジェクトを通して向上した能力についてです。

基礎力の二つ目、考え抜く力については、三つの中でも特に出来ていない部分です。事務室の方に言われるまで気づかない課題があったり、参加者募集のポスター制作が見学の直前までかかっていたりしていたので、課題発見力と計画力はなるべく早く改善する必要があります。しかし、この二点は普段の生活の中でも使う能力なので、意識して強化できるものだと考えています。創造力の部分は、一つ目の見学ではすでに見学ルートが決まっていたので、手を加える部分はあまりありませんでしたが、二つ目の見学の内容は一から話し合っただけだったので、ある程度強化できたと思われそうです。

三つ目の、チームで働く力ですが、発信力については、お互いの意見を出し合うことが少なかった等、改善の余地があるものの、その他の力については概ね身につけられているように感じられます。

全体を通して見ると、望んでいた結果が得られない部分もありましたが、それ以上に向上させることができた点も多くあったので、結果として、このプロジェクトに参加して得られるものは大きかったと感じました。

今後期待できる成果の波及効果（1 ページ以内）

- 今後、成果物を大学がどのように活用することが望ましいかを記載してください。
- 成果物をさらに波及するための考える取り組みを記載してください。

まずは、“今後、成果物を大学がどのように活用することが望ましいか” についてです。これは、HP などでも成果を発信して、参加者募集の際の宣伝材料にしてもらうのが良いだろうと考えられます。また、今回得られた NTT との連携を使って、ほかの企画を実施する際に NTT 西日本の別の部門を紹介していただいたりするのも良いでしょう。

大学の HP でプロジェクトの成果を発表するのは一定の宣伝効果が見込めるとは思います。HP だけでは見ようと思った人しかそこにたどり着かないような気がするので、このプロジェクトの知名度を上げる活動も必要だと思われます。

知名度を上げるには、まずプロジェクトの参加者を増やすことが必要になってきます。今は日本人の参加者が考えた企画に参加したいと思った留学生が集まる仕組みになっていますが、この場合、集まる人数が企画の内容に左右されてしまいます。そこで、留学生が企画を立ち上げ、そこに参加したい日本人やほかの留学生を募集する、というのもやってみるのはどうだろうかと思いました。さらに、共修プログラムに関わった留学生向けに「どこで共修プログラムについて知ったのか」「どうして参加しようと思ったのか」などの聞き取りをすることで、留学生の視点からの意見を取り入れれば、知名度をより上げる方法を見つけられると思います。

最後に、知名度を高めるとどうということにつながるかを考えます。一つは、これから新しい企画を立ち上げようといった時に、コンタクトを取った企業の方がプロジェクトのことを知っていれば、見学の依頼が通りやすくなる可能性があります。さらに、企業と連携してプロジェクトを進めたという業績ができれば、「留学生を増やす」という本来の目的をより達成しやすくなります。